

閩語音韻答問箋釈

——服部四郎博士と王育徳博士の書簡——

平 山 久 雄

1. はじめに
2. 服部四郎博士書簡
3. 王育徳博士書簡

1. は じ め に

服部一王書簡 本稿に紹介するのは、島根県立大学メディアセンター内の服部四郎文庫に収められている書籍・資料の旧蔵者である服部四郎博士（1908～1995、東京大学名誉教授）と、その教え子王育徳博士（1924～1985、明治大学教授）の間に交わされた書簡である。これらは戦後日本の東アジア言語研究に関する消息の一斑を伝える点で、また二人の学者の学問に対する姿勢と人柄を示す上でも、意義のある資料と考える次第である。

服部先生から王博士宛の書簡は、1956年3月21日付けから1960年12月22日付けに至る15通、及び1985年4月27日付け1通の計16通で、王雪梅夫人の所蔵。すべて葉書、細字で宛名面の下半分に続くものもある。本稿はこれらを年代順に排列し、その順序に従って服部①、服部⑬のように呼びたい。王雪梅夫人によると、1961年春に転居の後は電話がついたので、先生からは専ら電話で連絡をいただいたとのことである。1985年の一通（服部⑬）はその例外で、王博士の書簡（王⑬）に対する返書である。

王博士から服部先生宛の書簡は、1961年7月15日付けから1985年4月24日付けに至るやはり16通。便箋に書かれた手紙が主であるが、葉書もまじる。やはり年代順に排列して王①、王⑬のように呼びたい。これらは1通（王④）を除き服部四郎文庫に含まれる王育徳博士の著作に挟まっていたもの。現在原本は令息服部旦氏の所蔵、服部四郎文庫の王博士著作にはコピーが挟まれている。服部旦氏によると、先生が晩年身辺整理をされた際に書簡も相当処分されたとのこと、これら16通は運よく残されたものと言えよう。書簡の時期はあたかも前記転居の直後から、歿年（9月9日逝去）の春にわたっている。

王⑭・王⑬の一部（第三者の消息に関する部分）を省略した外は、服部・王ご両家の了解のもとに全文を掲載する。服部書簡は句読点を稀にしか用いず、句読点に当たる箇所は

一画あけるのが普通である。その点、できるだけ原状を保存した。服部書簡・王書簡とも、とくに「横書き」と注したもの以外、原文はすべて縦書きである。

各々の書信に1)2)などの形式で注をつける。人名についてカッコ内に記した職名は当時のものである。

書簡本文・注に見える服部先生の論文・文章は、下記の三つの著書に収録されたものが多い。

服部四郎『日本語の系統』、岩波書店、1959年。

服部四郎『言語学の方法』、岩波書店、1960年。

服部四郎『一言語学者の随想』、汲古選書1、汲古書院、1992年。

各々『系統』『方法』『随想』と略称。これら所収の文については原掲載誌の注記は省略し、刊年のみを記す。

服部旦氏並びに王雪梅夫人は書簡に関連する諸事項につき教示を与えられ、かつ草稿を閲読して誤りを訂正して下さった。また、伊豆山敦子氏、上村幸雄氏、輿水優氏、須山名保子氏、田村すず子氏、松本昭氏にお教えをいただいた部分がある。文中その旨を必ずしも記していないが、これらの方々にあつくお礼を申し上げたい。ありうる誤りや不備が私の責任であることは言をまたない。なお、解説者は東京大学中国文学科における王育徳博士の数年後輩、やはり服部先生にお教えを受けた者である。

服部四郎博士 服部四郎博士は近代日本の代表的な言語学者として知られている。三重県亀山市（現）に生まれ、旧制第一高等学校を経て1931年東京帝国大学文学部言語学科を卒業。大学院に在学中、当時の満州国の北部に留学して蒙古語・満州語・タタール語などアルタイ系諸民族語の調査・研究に従事、1936年帰国して東京帝国大学文学部講師、1942年同助教授、1943年『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』により文学博士、1949年以降は言語学科主任教授として1969年の定年退官まで多くの優れた後進を育てられた。またその間、東京外国語大学（全国共同利用）アジア・アフリカ言語文化研究所の設立に尽瘁された。東大定年後もラボ国際交流センター東京言語研究所運営委員長として「理論言語学講座」の運営に当たり、日本言語学会会長（1975・76年度）に任じ、東京における第13回国際言語学会会議（1982年）を組織委員会会長として開催するなど、晩年まで旺盛な活動をつづけられ、文化功労者としての表彰（1971年）、学士院会員への選任（1972年）、文化勲章受章（1983年）など多くの栄誉を受けられた。

服部先生のご専門は言語学全般に及び、音声学、音韻論、意味論、文法論、日本語アクセント、蒙古語をはじめとするアルタイ諸言語、アイヌ語、日本語の系統論などの分野で重要な貢献をされた。欧米の記述言語学及び比較言語学を、独自の構造主義的な見方と精緻な言語観察方法を通じて批判的に摂取し発展させたところに先生の大きな特色があろう。日本言語学会の会誌『言語研究』は108号（1995年11月）を「故服部四郎博士追悼号」として遺影・追悼文とともに「服部四郎博士略年譜」「服部四郎博士主要著作目録」を載せた。

より完全な著作目録としては服部四郎『増補改訂 著書論文目録』（1991年、東京、汲古書院）が公刊されている。先生晩年の回顧として座談会「学問の思い出——服部四郎博士を囲んで——」（服部四郎・北村甫・梅田博之・大江孝男・田村すす子、『東方学』83、1992年、177頁－196頁）があり、「略年譜」「主要著作目録」が付載されている。先生の遺された蔵書及び蒐集資料は、2000年7月に島根県立大学に寄贈された。傑出した言語学者の蔵書がそのまとまりを失わぬ形で保存され、北東アジア研究に利用されることは、先生のご遺志にも適うものとして喜ばしい。

王育徳博士 王育徳博士は台湾台南市の出身。旧制台北高等学校を卒業し1943年東京帝国大学文学部支那哲文学科に入学。一旦帰郷し、1947年二・二八事件（国民党政権による台湾人殺戮）に遭って香港に逃れ、1950年再来日して東京大学文学部中国文学科に再入学、1953年大学院に進み、1960年博士課程修了。1967年明治大学商学部専任講師、同助教授を経て1974年教授に進んだ。1969年『閩音系研究』により東京大学より文学博士の学位を授与された。主査は服部先生。この博士論文は著者の逝去後、論文「台湾語の記述的研究はどこまで進んだか」（服部⑩注20）参照）を併せ、『台湾語音の歴史的研究』（東京、第一書房、1998年）として、原稿のまま影印出版された。同書には倉石武四郎序・服部四郎序・著者遺影・著者年譜・著作目録、並びに平山の解題が含まれている。この出版は服部先生のお勧めと、ご家族及び台湾同郷の人々の尽力による。また主要著作の中国語訳を収める『王育徳全集』（台北、前衛出版社）が刊行中である。蔵書3000余点は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に収められ、同研究所から『王育徳文庫目録』（1999年）が公刊されている。

王博士は戦後日本における閩語（漢語福建方言）とくに閩南語（南部福建及び台湾方言）研究の創始者であり、その中心であった。その著『台湾語常用語彙』（東京、永和語学社、1957年）は、自身の言葉である台南方言の常用語彙5000を対象とする詳しい記述的研究である。その他にも台湾語及び台湾に関する多くの論文や著書・教科書があり、東京大学・東京教育大学・東京外国語大学・東京都立大学等で台湾語の授業を担当され、そこからは閩南語の研究者が幾人も育っている。

王博士はまた台湾独立運動の日本における推進者であり、雑誌『台湾青年』を発行して世論に訴えつづけた。同誌には創刊号（1960年4月）から38号（1964年1月）まで24回にわたり音韻・語彙・文法・ローマ字表記など多面にわたる「台湾語講座」を連載した。晩年は台湾出身元日本兵の補償問題解決に奔走し、そのための過労が心筋梗塞による急逝を招いた。

服部先生と王博士 王博士は大学院在学中に服部先生の講義を聴講し（最初は藤堂明保先生のお勧めであったかと思われる）、課外でも種々指導を受け服部先生に親炙した。服部－王書簡に見られる暖かい師弟関係は、王博士が母語である台湾語の科学的研究を生涯の目標と定め、そのためには言語学的な記述方法・比較方法を身につける必要があると考え、

学科の厚い壁を越えて服部先生に指導を仰いだこと、服部先生も王博士の真摯で率直な態度に動かされて、極めて好意的に対応されたことに由来すると思われる。服部先生はまた、ご自身の理論を試す一つの場として、王博士による台湾語の記述研究に大きな関心を寄せておられた様子が窺われる。王博士の短文「恩師服部四郎博士」(『台湾語初級』東京、日中出版、1983年、84頁)がこれを生き生きと伝えている。

恩師服部四郎博士(東大名誉教授・文化功労者)のご恩は大きい。わたしが東大大学院に在学中、先生は言語学科の主任教授で、その名声は天下に聞こえていたから、無理にお願いして言語学演習や音声学の授業を聴講させてもらった。

いわば傍系の弟子にすぎない私を、先生はことのほか可愛がってくださり、大いに言語学科の学生たちをうらやましがらせたと聞いた。

1957年秋、私は家売りはらって『台湾語常用語彙』を自費出版した。先生におそるおそる序文をおねだりすると、先生は言下に快諾された。が、「書く以上はもっと勉強しませんとね」といわれ、毎週木曜日、授業が終ったあと研究室に残され、先生が書いてこられた原稿を逐一私の確認をとりながら修正していかれた。

研究室は7時になると、用務員が鐘をチリンチリンと鳴らして閉館をふれまわる。「おや、もうそんな時間になりましたか」と先生はにっこり笑われ、それから帰り仕度をして、お茶の水駅までごいっしょするのであった。

先生の序文は1篇の長大な論文で、主として台湾語のe⁵(兮)、私がかかりに「確認の語気詞」とよぶ単語についての考察であった。考察は精緻をきわめ、北京語をはじめ日本語や英語やロシア語まで参考にされている。先生の序文で巻頭を飾れたことで『台湾語常用語彙』は価値をもったと私は考えている(そのご先生の『言語学の方法』に収録)。序文の冒頭に先生はこう書かれた。「王育徳さんのこの労作は、台湾と台湾語に対する熱烈にして純粋な愛情の結晶です。……国語愛と科学精神とが一人の人の中に共存しているのです。これは実は、驚嘆に値することだと思います」。過分のおほめの言葉をいただいて感激したのだが、私の台湾と台湾語に対する愛情は先生を裏切ることはないと言えとしても、学問となるとまだまだ未熟で、ひそかに恥入っている次第である。

当時の中国文学科からは、松本昭氏、故橋本萬太郎氏、それに私も相次いで服部先生の教えを受けたが、教室での師弟関係を出るものではなかった。服部先生は他の学生に比べて年齢が近く人生経験の豊富な王博士に対し、いわば大人同士の話ができる相手として親しみをもたれることもあったように思われる。たとえば先生の定年間近のころ「王君、学問も大事だが生活も大事ですよ」と漏らされたと伝え聞いて「先生やっとそれに気付かれたか」と我々悪童は喜んだものである。王博士の恩師には東大中国文学科の倉石武四郎先生・藤堂明保先生もおられるが、中国・台湾問題に関して一定の立場をもっておられたので、王博士には阻隔感があった。服部先生はその面でも王博士が真情を吐露できる少ない

日本人の一人であられた筈である。

閩語・台湾語 ここで閩語・台湾語などの名称につき説明しておきたい。閩語は官話・呉語・粵語・客家語などと並び漢語（漢民族の言語の意、いわゆる「中国語」）を構成する大方言の一つであり、福州を中心とする「閩東語」、厦門を中心とする「閩南語」、内陸の建甌周辺に分布する「閩北語」に大別される（王博士の時代には「閩北語」の存在は未だ知られず、「閩東語」が「閩北語」と呼ばれた）。数百年来台湾に定住する漢人の多くが日常用いるのも閩南語であり（一部は客家語）、とくに厦門一帯の方言とは極めて近い。「台湾語」とは台湾で話される閩南語の意味である。戦後台湾では北京標準語である「国語」が公用語とされているので、台湾語は日常生活の言語として「国語」と併存しつつ競い合っている。

王博士が「中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」（服部⑪注17）参照）で示されたように、基礎語彙200語中の共通残存語率（同語源語の占める比率）からみて、閩語は他の大方言のいずれとも距離が大きい、即ち厦門（閩語）との共通残存語率は

北京（官話）51.56% 蘇州（呉語） 54.16%

広州（粵語）56.77% 梅県（客家語）59.90%。

因みに共通残存語率は広州－北京間70.77%、日本本土（東京）－沖縄（首里）間約65%、英語－ドイツ語間60%。ここからも漢語において閩語が如何にユニークな位置を占めるかが知られる。

白話音と文言音 服部－王書簡には「白話音」「文言音」の語がしばしば出る所以、それらにつき説明しておきたい。

「白話音」（口語音）とは、その字が口語語彙として読まれる際の発音、「文言音」（文語音）とは文語や文語風の「かたい」語感の語として読まれる際の発音。北京標準語で「薄」が「薄い」を表わす口語形容詞として *báo* と読まれるのは白話音、「薄弱」「浅薄」など文語的な語彙の中では *bó* と読まれるのは文言音である。標準語で白話音・文言音の読みわけのある字はごく少数であるが、閩語とくに閩南語では、相当多くの字（『台湾語音の歴史的研究』165頁によると33%強）について白話音と文言音の区別がある。たとえば「山」の白話音は *suan*¹、文言音は *san*¹ である（*n* は先行母音の鼻音化を、¹ は陰平声を示す）。

白話音は閩語独自の変化を経ている場合もあるが、また、他方言では失われた古い姿を保つ面もあり、漢語史の研究にとって極めて興味のある材料である。これに対して文言音は、恐らく9・10世紀ごろの北方中国音を古典読誦の際の「正しい」発音として採り入れたのに由来し、当時の北方中国の発音特徴をよく伝えている。数年前、私は唐詩を講義する際の参考資料として、ある台湾出身の学者に依頼して「春望」など杜詩何首かを台湾文言音により朗読していただいた。そのテープを聴いて驚いたのは、恐らく杜甫にもこれはどうやら自分の詩だと分かると思われる程に、理論上推定された唐代の発音に近いことで

あった。他の方言では、北京標準語はもちろん粵語なども含めて、程度の差はあれ唐代の発音からは大きく離れている。

2. 服部四郎博士書簡

①1956.3.21

お葉書拝見しました 学年末の事務と執筆と知人の不幸とで寸暇なく御返事がおくれま
した

来る二十四日の土曜日には研究室で奄美大島方言の調査をして居りますが¹⁾ 午後四時頃
には終る予定です その頃に言語学研究室までお見え下さいませんか

先ずは御返事まで

匆々不一

三月二十一日

②1956.12.27

前略

お元気で御研鑽のことと存じます

さて突然ですが いつか伺いました「豚」を意味する福建語（「オワ」に近い単語）に
ついて もう一度詳しくお教え願えませんか お手際の折で結構です²⁾

先ずはお願いまで

不一

十二月二十七日

③1956.12.30

拝復

御鄭重なお手紙を有難うございました

ご教示はお名前とともに引用させて頂きたく存じます³⁾

また何よりの品を頂戴いたし家族一同深謝申上げて居ります

来年もお元気に御活躍のほど切にお祈りいたします

取りあえず御礼までに

不一

十二月三十日夜

④1958.12.29

年もおしつまって参りましたが 御健勝のことと存じます 此度は何よりの品を誠に有
難うございました 御芳志のほど深く感謝いたして居ります また月曜日の授業の折には
極めて興味ある御研究を御発表下さいまして有難うございました⁴⁾ 私たちの前に大きい問
題を投げかけるものです どうして+に？をつけないとなくなるか⁵⁾ 私たちの知識
が不完全であるために違いありませんが どういう風に不完全であるためか などと考

ますと 知識慾にかりたたれるのを感じます^(ママ) どうかうんと研究して下さい 研究が完全になるには長い年月がいるでしょうが それまでの状態でも、明かなこととそうでないこととははっきり区別してかけば発表の価値が十分あると思います。「言語研究」「民族学研究」「東方学」などが可能性のあるものと考えられます

十二月二十九日

⑤1958.12.30 (横書き)

前略

その必要もないこととも考えて居りますので前便では申しませんでした 念のため一筆認めます 言語の比較研究に携わる学生諸君には、沢山参考書のある中でも L. Bloomfield: Language⁶⁾ の18章と20章、特に後者を熟読するようすすめています。読み方にも色々あり、ざっと一通り目を通すやり方もありますが 此場合は特に熟読が大切です それから平凡社「古事記大成」の拙文⁷⁾ の音韻法則、言語年代学に関する部分はお読み下さいましたでしょうか もしまだでしたら抜刷を差上げます

12月31日

不一

⑥1959.1.10

前略

態々お見え下さいましたのに留守をしてお目にかかれず残念でした 正月早々仕事に追われています その節はまた結構なお菓子を有難うございました どうか今後はこのような御心配下さいませぬように

御論文⁸⁾ 拝見しております 近い関係に立つ方言をまずお取上げになりましたことは賢明な策であると存じます いずれ御拝眉の上

一月十日

不一

⑦1959.12.30

愈々押しつまって参りましたがお元気にて御研鑽の事と存じます

さて先日は結構な品を頂戴いたし恐縮いたしました 毎度毎々の御芳情厚く御礼申上げますとともに今後はどうか御放念下さいますよう御願いたします

暮れには少しは暇になるかと思って居りましたら一週間前から妻が又々臥床⁹⁾ 家の内がすっかりゴツタ返しになりました 幸い漸く恢復のきざしが見えてきましたので 心の平静だけはとりもどせるかと考えて居ります。文言音・白話音のお話を伺いました時「音韻法則」を誤解して見えるのではないかと心配になりましたので「日本語の系統」「世界言語概説」などの拙文¹⁰⁾ の該当の箇所を熟読頂きたく思いました いづれ御拝眉の折に

十二月三十日夜

不一

⑧1960.1.12

拝復 お手紙拝見しました 文言音・白話音の問題 大変面白いと思います ご論文ができましたら拝見させて頂きましよう 音韻変化に関してははっきり言えることは 元同一だった音が、同一の単語において、自由自在に二つ或いはそれ以上の音になるということ はあり得ないということです 一般に一つの音が、二つ(以上)の音に変化するの は 音的環境が異なるためです

私がどんなに驚こうとおかまいなしに質問はどしどしして下さい 私は王さんだけがわからないのだとは決して思っていない むしろ王さんでも誤解しておられたり おられるらしかったりすることが私にとってショッキングだったのです

私の中学時代¹¹⁾ に英語の名先生¹²⁾ がありましたが、その方が、よく質問して他の学生に笑われた学生が後に大変よくできるようになったと述懐しておられました

妻がまだ寝たきりなものですから御返事がおくれました 御健闘を切に祈ります

一月十二日

⑫1960.1.16

お手紙有難うございました お手紙は私を大変喜ばせてくれました お礼は私から申したいほどです 私は何かの議論を始めると相手の感情のことなどすっかり忘れてズバズバ言っ てのける癖があります それで人を怒らせて了って 事の正否に係らず反対されるということが屢々あります それを大変残念に思っ てはいますが やはりつい同じことを繰返して了うのです あなたのように私の真意をわかって下さる人が時々あると大変嬉しく なります どうか私の態度にお懲りなくドシドシ質問して外の学生に手本を示して下さい

心の中ではあなたの御態度を感心している学生もあるのです 義妹¹³⁾ が病気のためそちらへ行って居た母¹⁴⁾ が帰って来て呉れましたので 妻の食事の世話などの手数が省けて大分助かるようになりました 授業は何とかして正常に始めたいと思っています

一月十六日

⑩1960.2.28 (横書き)

拝復

お手紙拝見しました ご論文を読み合う機会を作るつもりですがこの二日に学校の方は(本郷の仕事は)一段落つきませんが その後10日ほど非常に急ぐ仕事にとられますので それがすんでからになります 例の *Current Anthropology* の Hymes の論文 *Lexicostatistics So Far*¹⁵⁾ をお読みになりましたでしょうか 図書館の続きの建物(赤門附近)の四階に石田英一郎教授¹⁶⁾ がおられますから まだ入手しておられませんようでしたら 同教授にお問合せになって下さい。3323内線 不二

2月28日

⑪1960.3.8

前略

来る十日（木）の午前中入試監督で登学します 午後はいいておりますから お差支なければ一時半——二時頃から御論文¹⁷⁾ を拝見してもよろしゅうございます

右取りあえず

匆々不一

三月八日

⑫1960.4.29

前略

御論文を『言語研究』に掲載の件 二十八日の編集会議で正式に決定しました 至急組版へ廻したいと言っていますので 御訂正の場合は出来るだけ早くお願いいたします その他 表の組方 音声記号についてもご相談あり 二日（月）の三時からの授業の前にもお目にかかれたら幸甚に存じます

不一

四月二十九日

⑬1960.8.21

気候不順の折からお変りございませんか 私は“世界音声学会議”¹⁸⁾ というので七月から八月半まで忙しい目にあいました 『言語研究』の御論文については色々の事を聞いており一度お目にかかってご相談したいと思いながら まだ印刷費が最終的に確定しませんので それがきまってからなどと考えつつ延引しています 夜の八時頃なら在宅します故 一度お電話下さいませんか（371 五九九八です）

「表」以前の文章が約二頁ですのでどうしても一頁白紙になります これを約三頁になるように書きのばして頂くよう風間君¹⁹⁾ に話しましたが伝わりましたでしょうか

匆々

⑭1960.12.11

前略

貴著「台湾語常用語彙」所載の拙文を近刊の拙著「言語学の方法」（岩波書店）に転載することを御許可下さいますようお願い申し上げます

頓首

十二月十一日

⑮1960.12.22

お葉書を有難うございました

お見えになった時間は 風邪で休講にしたときでした(掲示がしてあったはずです) 次の週にお見えにならなかったのどうしたのかと思っていました

無事ご越年佳き年をお迎えになりますようお祈りいたします

不二

二伸

只今結構なる品々頂戴 恐縮いたしております

十二月二十二日

⑯1985.4.27

拝復

ご論文²⁰⁾ ならびにお手紙有難うございました

I 章も II 章も大変有益で学界から歓迎されることと思います

学位論文の手直し出版の意欲が出てきました由 これほど嬉しく事はありません^(ママ)

お二方のご健勝を祈ります

頓首

四月二十七日

3. 王 育 徳 書 簡

①1961.7.15

服部先生

暑い日が続きますが、お元気でしょうか。

福田さん²¹⁾ から聞いた話では、先生はこの夏に中近東へモンゴル語のご研究にご出張²²⁾ なさるそうで、いつもながら先生の疲れを知らない好学心に感服すると同時に、先生のご健康が案じられてなりません。

先生と私たちの差はただでさえ、天壤の開らきがありますところへ、先生は益々ご研鑽を積まれる一方で、私たちは愈々遠くへ置き去りにされてしまいます。

さて同封の二雑誌は一つは例の《台湾青年》で、今号の台湾語講座²³⁾ に、私は語源探求の一つの態度を示しております。それでいいのかどうか不安です。もう一つ²⁴⁾ は、これも駄文の域を出ませんが、別の観点から台湾方言を取り上げたものです。

どうかお暇のありましたときに、ご高覧の上ご批判を賜りますようお願い申し上げます。

では、お元気でご旅行をなされますよう、心から祈ってやみません。

七月十五日

王 育 徳 拝

②1962.1.30

服部先生

ごぶさたしています。お元気のことと存じます。

学問したくてたまりませんのに、周囲がそれを許してくれないので、気が重いです。どうも私に代る人がないようで、今更投げ出すわけにもいなくて……。『台湾語講座』ぜひご高覧の上、ご批判くださいませ。未発表の私見試論を少しずつ展開していております。一般には好評をいただいているようですが、何といたしても、先生が一番こわいです。間違っているところがありましたら、早目にご指摘ください。

王 育 徳 拝

一月三十日

追伸 「計量国語学」抜刷²⁵⁾ どうもありがとうございました。気持ちがスーッとしました。

③1962.9.18

服部先生

ながいことご無沙汰しました。けれども一日として、高潔なお人柄と厳峻な学問的態度を忘れたことはありません。

私は近ごろ身辺多忙を極め、東大には稀にしか行かなくなりました。明大の方は週六コマ三日出講しております。先生譲りのきびしい教学法で学生に接していますが、割りとなつてくれるので嬉しいです。

『台湾青年』という雑誌が去る九月十一日の朝日の「季節風」²⁶⁾ に紹介されましたが、先生お読みになりましたでしょうか。これは私が教育問題について触れた論文が起縁^(ママ)だったのですが、本当は『台湾語講座』が私にとっては一番楽しくもあり、意欲的でもあるのです。先生のご教示を仰ぎたいと思います。

橋本君²⁷⁾ が先生のお力ぞえで留米しました。研究室でささやかな歓送会を開いたのですが、なぜ先生をお招きしなかったかと彼のために残念に思いました。

不肖の弟子のささやかな努力のしるしとして、合訂本をお送りしました。どうかご笑覧ください。

ご健勝をお祈りしております。

九月十八日

王 育 徳

④1971.10.28

服部先生

このたびは文化功労賞をご受賞²⁸⁾ になり、心からお慶び申し上げます。

これは先生やご家族の名誉であるばかりでなく、私たち門下生の名誉でもあります。ほん

とうに嬉しくてたまりません。

八月二十六日に先生のご教示を受けて²⁹⁾以来、ちょうど二カ月たちました。

あれから本格的に取り組もうとした矢先、またしても種々のよんどころない仕事で中断させられてしまいました。

しかし、ご教示に従いまして、再検討を始めた結果、多少の成果もおさめたように思いました。それは³⁰⁾、福建語の白話音には、ひょっとして、歌・戈韻がなく、開口は泰韻、合口は灰韻に合同していたのではないかという推定であります。

一つの示唆として、「火」は一般に戈韻「呼果切」と韻書に出ていますが、『広韻』を調べますと、賄韻に「燂」呼罪切、南人呼火也とあって、

hue ³	he ³	hue ³	hə ³	hue ³	huoi ³
台南	厦門	漳州	泉州	潮州	福州

という出方³¹⁾は、まさしく灰韻の白話音と同形であります。

いずれ材料をそろえて、またご教示を仰ぎたいと思います。

仕事の一つは、周囲の台湾人、一部の日本人から台湾語の教科書を至急つくれと催促されて、九月の一月間をつぶして、約二百枚の原稿を書きあげたことです。自分としては十数年の中国語教授の経験をいかして、まあ評価に堪えうる入門教科書を作りあげることができたと思っています。現在割付の段階で、年末には出版される予定です³²⁾。

仕事の二つは、例の運動のことで、一面で独立を叫びつつ、一面で「国台工作」の可能性をさぐるというむずかしい工作をやってきました、そのため東奔西走しました。

ご存じのようにアルバニア案が通過してしまい³³⁾、台湾の運命の決定的瞬間も迫ってきた観があります。中共の併吞が国際的に是認される前に、独立国としての旗上げをする必要があります、仕事も一段と迫車^(ママ)をかけざるをえません。若い活動家では、国府側にとっても、日本側にとっても、信頼度が足りないようですので、自然私のようなものが渦中に立たされます。

最近、天理大学の鳥居久靖教授の還暦記念論文集刊行の企画があり、かねてお世話になっていた関係から、語学の論文一篇を書くことを承諾しました³⁴⁾。

先生が拙著の序文³⁵⁾に「白」「真白」を分析されて、「不定人称者」「第一人称者」のお考えをご披露になりましたが、中国語で単に「鳥飛」「他去」と表現しただけでは、何となくしまりが無いという事実を、「不定人……」「第一人……」の観点から解析できないかと考えてみています。

時枝先生を批判されましたご論文³⁶⁾も参考にしていますが、お気づきの点がありましたら、ご教示下さい。

今日は先生に慶賀の意を表するついでに、近況をご報告しました。

十月二十八日

王 育 徳

⑤1976.4.20

服部四郎先生

ごぶさた申しておりますが、お元気ですか。

新学期が始まって、ようやく暖くなってきました。ところが今日また七十二時間の交通ストにぶつかって休業となり、まだ授業にはいれません。

先週のガイダンスの時間点呼してみたら、第二外国語に中国語を選択した学生は、去年よりもさらに減少しているのがわかって、楽しいような寂しいような気持ちがしました。熱病的な中国ブームが完全に去ったのはよいことですが、今度は教授会での発言権が弱くなりそうで……。

在宅して、たまった雑誌など通読していますと、『自由』五月号に花井等「ロッキード事件と日米の政治・文化比較論」があって、中で先生のお言葉「日本の討論会や教室における討論の一つの特徴は、試合の精神で裏付けられていることである。『やっつける』とか、『やりこめる』とか、『一本まいった』とかいう。」³⁷⁾云々と引用されているのが眼に止まり、懐しく思った次第です。

先生がいつどんな場所で、このような随筆？をお書きになったのか、機会がありましたら教えて下さい。先生のお言葉は、先生のこれまでのご苦勞を知ってるだけに、味合かい深いものを感じました。

ロッキード事件で国会とマスコミを中心に表現されております日本人のきわめて情緒的な反応は、実にヒステリックな程度にまで昂じているように思われ、将来のことを予想すると、心から憂慮にたえません。一つの被害として、昨年来の「補償問題」は政治家への働きかけを強化しようと思っても、「それどころでない」とケンツクくっています。

中国情勢は奇々怪々で³⁸⁾、「毛沢東さまさま」の人たちの泣きべそかいてる様子が眼に見えるようです。ガタガタやっている限り「台湾解放」³⁹⁾は不可能で、ありがたいのですが、一面蔣政権に安心感を与えるマイナスもあり、痛し痒しです。

ひまをみつめて論文の手直しを進めていますので、気ながに見守っていて下さい。

先生と奥さまのご健勝を祈ります。

四月二十日

王 育 徳

⑥1981.2.15

服部四郎先生

ご無沙汰申しておりますが、お元気ですか。

明大商学部の入試は明日に迫り、監督と採点で向う一週間罐詰状態になります。

最近、中国の経済事情が悪化し、これまで日中親善に浮かれていた政財界をあわてさせています。「だからいわんこっちゃない」とせせら笑って見えています。それにつけても台

湾見直しの機運が出てきたのは結構なことで、昨年春から八重洲ブックセンターで『台湾語入門』が驚くほどのテンポで売れているのです。

ところで、第十三回国際言語学会議の開催準備で何のお手伝いもできませず、気に病んでいましたところ、昨日鐘ヶ江先生⁴⁰⁾よりお手紙をいただきましたので、ご参考にと同封致しました。

ここまで書いたところへ、先生のお電話に接しました。先生がお元気でいらっしゃるかと、学問への熱情が少しも衰えていらっしゃるかと、私に対する師弟愛の篤いこと等を知って、安心すると同時に感激しました。

別便で拙著一冊⁴¹⁾奉呈致しました。お役に立ちますかどうか自信がありません。

一九八一年二月十五日

王 育 徳

⑦1981.7.18 (葉書)

拝啓 連日猛暑が続いておりますが、先生はじめ奥さまお元気でいらっしゃいますか。十三回国際言語学会議もいよいよ一年足らずのあいだに迫り、先生には何かとお忙しいことと存じます。大学は今週で終り、夏休みに入りました。相変わらず雑用に追われておりますが、体だけは順調で、血圧も一三六～八〇の線にもどりました。

敬具

七月十八日

⑧1983.5.20

拝啓

そのご大変りございませんか。

このたび『台湾語初級』⁴²⁾をコマーシャルベースで出すことができました。十年前の『入門』と合わせ、テキストを二冊つくり、責任の一半を果しえたと喜んでおります。

『初級』には前に先生からご教示いただいたアクセント素⁴³⁾による区切りを実践しております。台湾語のみならず中国語のテキストで最初の試みと自負しております。文節に似た文法単位を抽出するのを容易にしております。

先生のことを随筆に書きました⁴⁴⁾。もしお気にさわるようなところがありましたら、お許し下さい。

一月に出版した『台湾海峡』⁴⁵⁾が刺激になって、この六月の東大中哲文学会(半分同窓会的、半分学会的)で特別発表することになりました。題は自由につけてよいというので「学問するとは戦うことの台湾文学・語学研究」としました。

平山(松本・橋本)さんとも相談し、先生と奥さまを一席ご招待し、ご慰労申し上げますとともに、いろいろ先生からまた教わりたいと思っていますが、如何でしょうか⁴⁶⁾。

一九八三年五月二十日

王 育 徳

服部四郎先生

⑨1983.5.24

前略

久し振りに先生からお電話をいただき、感激しております。

今回出しました『台湾語初級』は贈呈した中国語学者、言語学者から一様におほめの言葉をいただいております。出版元が調査したところでも『入門』に比べて内容がおもしろそうだという評判のようでした。で、目下『入門』と『初級』でもって二人三脚の形で比較的好調に売れているようです。

『入門』は一九七二年に自費出版したのですが、日中出版に『入門』の版權を譲ってくれる代り『台湾海峡』を出してやろうという条件で話をつけました。『海峡』の方は私が期待していたほどは売れていませんが、『入門』は日中出版のねらい通り売れまして、それで一段高級のテキストを書いてくれと頼まれたのでした。以前から構想をあたためていましたので、三月ほどで二百五十枚書きあげることができました。

『初級』の特色としましては、先生のアドバイスを入れて//でアクセント素を示したこと。構造（英語の phrase に相当するもの）より大きい文法単位を設定する必要があることを示唆するものの如くであること。

しかし//で区切るについては当然のことながら口に出して読む必要があった。漢字をベタベタと並べて読者の判断に任せる式にはいかなかったこと。従って一知半解の知識では本書のようなアクセント素に考慮した教科書はつくれないのではないかということ。私の知る限り北京語にも他の方言にも明確にアクセント素に配慮した教科書はないということは事実です。

北京語の教科書は中国大陆の事情を反映して個性のない、おもしろくない、似たような会話がほとんどでしたが、『初級』では臨場感のある、生きた会話を心がけ、しかも毎課の会話にオチをつけたこと——昔、脚本を書いたことがあったその経験をいかしました。

三篇の散文は古典の読み方（文言音で）及び注釈、教会での牧師の説教調、それに私のくだけた平民調というように雰囲気をかえるという苦心も払いました。

とっつきにくい方言に興味をもたせるため随筆を書き、語学書としてでなく、読物として買ってくれる読者の開拓にも気をつかいました。

なお同封の「補講」はテープを買ってくれる読者におまけのつもりでつくったもので、四百部刷って三万二千元ほどしました。

以上、先生を前にして恥をかえりみず「自画自賛」し、先生が何か書かれる場合の参考にとおりました。奥さまによろしく。

五月二十四日

王 育 徳

服部四郎先生

⑩1983.6.25 (葉書)

いろいろとご高配賜り、感謝にたえません。松本君、橋本君、平山君⁴⁷⁾に早速連絡致しました。松本君は大学に出講しておりませんでした。が、橋本、平山両君たいへん喜んでおりました。実は私は今日の午後、東大中哲文学会で発表があります。先生のお電話でたいへん勇気づけられました。

六月二十五日

⑪1983.7.4

服部先生

昨日はお忙しいところ、また遠いところをわざわざ時間をつくって下さり、ほんとにありがとうございました。

先生をお送りしたあと、四人でまた部屋にもどり、興奮しながら、「先生変られたナ」「いや僕は変ってないと思うよ」「台湾語の転変の解明は大変だな」などとひとしきり感想を述べあって別れました⁴⁸⁾。私は一九八三年七月二日の集まりは歴史に残るイベントだと思います。

私の台湾語に関する著書や一部の論文について、先生がまとめて詳しい紹介をして下さり、高い評価をして下さったこと⁴⁹⁾は、私の光栄であると同時に、私に対するはげましでもあると考え、今後一層の努力を続けるつもりであります。私の知る限りでは、これまで北京語——何百種類も出されていますが——の教科書に対しても紹介や批評はなかったように思います。それが台湾語に対して先生からあのような温い、心のこもった紹介がなされるということはまさに画期的なことで、私個人の面目というまでもなく、学界に対する大きい刺激になると思います。先生ほんとにありがとうございました。

ああして先生お一人をタクシーに乗せてしまって、少し心細い気がしました。せめて先生を東京駅までお送りした方が安全だったのではないかと多少後悔めいた気分になりました。もちろんご無事でご帰館されたことに違いありません。

奥さまにくれぐれもよろしくおっしゃって下さい。

一九八三年七月三日夜

王 育 徳

⑫1983.8.13

拝啓

少しはしのぎやすくなりましたが、暑さは相変らずきびしいものがあります。お元気で

いらっしゃいますか。

先日はお忙しいところ、快く私たちの願いを聞き入れて下さいまして、ありがとうございました。また特に私のために時間をさいて下さり、感激なお新たなものがあります。

さて当日の写真できてきました。あまりよくうつっていませんが、記念にご笑納いただければ幸いです。私はこの写真は将来必ずや歴史的価値をもつようになるだろうと確信しています。

第三十八回終戦記念日に当り、偶然にも東京高裁で例の台湾兵補償請求の第三回公判がひらかれるのを機会に、台湾から二人ほど関係者をよんで集会を催し、氣勢をあげるという企画を立て、目下そのことで忙しい思いをしています。

運動は今年一杯で成果をあげることができるのではないかという見通しを立てています。

しかし何より気になるのは九月に発売される『言語』です。

ご健康を祈ります。奥さまによろしくご伝言下さい。

八月十三日

王 育 徳

服部四郎先生

⑬1983.8.20

服部先生

先日はお電話をどうもありがとうございました。九月中旬に出る『言語』十月号を楽しみにしています。

学問研究と関係がなくて恐縮ですが、同封の新聞切抜コピー⁵⁰⁾のように、八月十五日の集会等一連の行事が無事終って、私のこの夏の最大の仕事も一段落しました。新聞には出ませんが、十三日の総理府への陳情や十七日の代議士あいさつまわり等も私が引率するわけで、事前の打合わせや事後の討議等、相当の神経と時間を使います。

でもおかげさまで、特別立法の成立の成算は去年よりもずっと大きく、台湾の関係者も希望をもって今日帰台しました。成立すれば一千億円の補償ですから、台湾同胞のためによいことをしたことになります。金額のこともさりながら正当の権利を主張する習慣をつけるのに役立つことを期待するわけです。

残暑きびしいのでお体にお気をつけ下さい。

八月二十日

王 育 徳

⑭1983.9.15

拝啓

一雨ごとに涼しくなっています。先生にはいかがお過ごしですか。

待望の『言語』十月号ついに買い求めることができました。こうして活字になって雑誌にのりますと、趣きもまた違い、感激もまた新たなものがあります。先生、ほんとにありがとうございます。これでまた多くの若い言語学者を羨しがらせることでしょう。

先生が『入門』と『初級』の二冊にとどまらず、『台湾語常用語彙』から『台湾』『台湾青年』さらに『補講』まで私の過去の発表のほとんどについて触れられたことに、先生の大きい抱擁力と周到さを感じます。

日本に亡命してこの夏で満三十八年を数えましたが、この間台湾語の記述を中心に“台湾学”の研究に打ち込んできました。独立運動も補償要求運動も“台湾学”の実践面の一つのプロジェクトにすぎないといえますが、肝心の台湾語の研究は学界でほとんど無視された形で、一般社会でもその意義や学問的価値を知る人はめったにありませんでした。それを先生が今回はじめて紹介され高い評価を与えて下さったわけですから、今後の影響は決して小さくないと思います。私個人の立場を強くすることはもちろん、中国の方言研究者に希望と勇気を与えるに違いありません。(中略)

奥さまによろしく。

一九八三年九月十五日

王 育 徳

服部四郎先生

追伸：玉稿を『台湾青年』に転載すること⁵¹⁾をお許し願いたいと思います。

⑮1984.6.25 (葉書)

先生お元気ですか。いま NHK 三チャンネルの「ユーカラ沈黙の八十年」⁵²⁾を見終ったところで興奮さめやらぬままにペンを取りました。村崎さん、池上先生⁵³⁾らなつかしい顔が映りました。すべて先生の教え子であり、私の同学であります。カラフトに流刑になったポーランド人の非運、さらに解説者がたびたびいう「故郷と言葉を奪われた」アイヌに台湾人の運命をオーバーラップさせて、悲しい気持でずっと見続けました。先生がおっしゃられますように、早くよい台湾語の記録を残しておかなければいけません。

六月二十五日

⑯1985.4.24

拝啓

ご無沙汰申しておりますが、お元気でいらっしゃいますか。

去年の秋に台湾語について書いたものが漸く活字になりました⁵⁴⁾ので、先生のご高覧に供し、ご批判を仰ぎたいと思います。

I章でこれまでの台湾語・福建語の主だった研究を紹介し、II章で台南方言の詳細な音節表を公開しました。これは自分の研究でも初めてのことであります。この論文を書いて

いるうちに、だんだんと学位論文の手直し出版の意欲が出てきました。身辺相変らず多忙ではありますが、必ずやりとげなければいけないと思っています。(中略)

やっとよい季節になりました。どうぞお体を大切にしてください。奥さまによろしく。

昭和六十年四月二十四日

王 育 徳

服部四郎先生

注

1) 服部先生は1955(昭和30)年度東京大学文学部言語学科冬学期の言語学演習(木曜第二限)の一部として、56年2月16日から3月15日まで長田須磨氏の奄美大島方言の調査をされた。3月24日(土曜)には演習の番外として、それまでの調査に基づき奄美大島方言の音韻体系をまとめ、その表記法を決定された。長田氏の奄美方言調査に関わられた経過を記した長田須磨・須山名保子編『奄美方言分類辞典』(笠間書院、1977年)の服部四郎「序」に「東大言語学科の演習の時間に、長田さんの発音を観察して音声記号を決め、ついで音韻記号を作ったのは昭和28年ではなくて昭和29年の2学期だったようである」とあるのは、実は30年度の演習であったと思われる。以上はその演習に参加した福田(現姓田村)すす子氏のノートと記憶によって平山がまとめた。須山名保子氏の来信によれば、昭和32年度学習院大学での演習で服部先生が長田氏を迎えアクセントと動詞活用の調査が行われたとき、先生から渡された音韻表に「福田すす子作成」と記されていた。

福田氏ノート3月24日の項には「福建の北京語の音韻体系」と題する声母表・韻母表も載せられている。明らかに台湾方言のもの。察するに本書簡①は、王博士が台湾語音韻体系の所見につき再度批評を請うため服部先生のご都合を伺ったのに対する返事である。その結果、当日は奄美方言調査に加えて台湾語に関する議論も行われたのであろう。「再度」というのは、昭和30年度大学院演習「比較方法と記述方法」(月曜三限)の福田氏(学部四年生として特別に参加)ノート7月4日の項に「台湾の福建語の音素分析」として類似の(前者と簡繁補う点あり)声母表・韻母表、及び服部先生のコメントの記録があり、王博士の研究発表に対し服部先生が意見を述べられたものと推察されるからである。

2) 『台湾語常用語彙』によれば、ブタを意味する台湾語は「豚」di¹である。オワに近い単語とは何であるか不明。上村幸雄氏の教示によると、沖縄方言でブタを意味する単語(首里 /ɽwaa/)が漢語からの借用である可能性を考えられての質問であろう。

3) この引用を含む文章は不明。執筆に至らなかった可能性も考えられる。

4) やがて「中国語五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」(言語研究38、1960年)として発表される研究の内容を、服部先生の演習で王博士が報告したと思われる。言語年代学は、基礎語彙の変化速度がすべての言語・方言を通じ略一定であるとの仮定に基づき、同系諸言語・方言間の共通残存語率から、それらの言語・方言が祖語から分裂した年代を算出する方法。服部『言語年代学』即ち『語彙統計学』の方法について——日本祖語の年代——(1954年、『方法』所収)など参照。

5) 言語年代学の語彙調査表で、同一の意味を表わす複数方言の単語語形どうしが互いに音韻対応

- 規則に合致している場合には、それらが同一語源に由来するものと判定して+を記入し、合致しない場合は語源が異なるものと判定して-を記入する。ところが僅かに対応規則に外れるだけの場合にはこの判定が微妙となる。「+に?をつける」とはこのような場合に王博士が採用した「+?」という記入法を指す。
- 6) New York, Henry Holt, 1933年。日本語訳：服部四郎序・三宅鴻・日野資純訳『言語』(大修館書店、1962年)。その18章は“The Comparative Method”、20章は“Phonetic Change”と題する。
 - 7) 服部「日本語の系統——音韻法則と語彙統計学的“水深測量”——」(1957年、『系統』所収)。
 - 8) 『閩音系研究』第二章「親疎関係」(『台湾語音の歴史的研究』29頁-67頁)に当たるか。同章では同じく閩語に属する台南・厦門・潮州・福州の四方言について言語年代学的研究を行っている。
 - 9) 服部マヒラ夫人(1912~1999)。当時喘息(?)で床につかれることが多かった。
 - 10) 服部「日本語の系統(1)——研究の方法」(『系統』所収)、市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説 下巻』(研究社、1955年)所収服部「総説」のⅢ「比較方法の発達」を指すと思われる。
 - 11) 三重県立津中学校。
 - 12) 高野鷹二氏(1897~1973)。
 - 13) 小早川マヒニール夫人(1917~)、服部マヒラ夫人の令妹。当時東京都の引揚者寮に在住。
 - 14) マンスール・ラティファ夫人(1881~1972)、服部マヒラ夫人の母堂。
 - 15) D. H. Hymes “Lexicostatistics So Far” *Current Anthropology* 1, 1960, pp. 3-44. この論文については『方法』574頁に言及がある。
 - 16) 東大教養学部・東洋文化研究所教授、文化人類学者。
 - 17) 「中国語五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」(服部④注4)参照)の原稿であろう。服部⑫⑬にいう「御論文」も同じ。
 - 18) 同年8月3日から10日まで、東京及び京都・奈良において日本音声学協会主催 The First World Congress of Phoneticians が開催された。
 - 19) 風間喜代三氏(東大言語学研究室助手・日本言語学会幹事)。
 - 20) 「台湾語の記述的研究はどこまで進んだか」(『明治大学教養論集』通巻184人文科学、1985年。『台湾語音の歴史的研究』1411頁-1509頁所収)。I章「これまでの研究」、II章「台南方言の音韻体系」より成る。なお王⑩参照。
 - 21) 福田すず子氏(東大言語学科大学院生・服部①注1)参照)。
 - 22) 服部先生はモゴール語(蒙古系民族モゴール人の言語)調査のため同年7月末から3カ月間アフガニスタンへ出張された。服部「西南アジアに『蒼き狼』の子孫をたずねて」(1962年、『随想』所収)参照。
 - 23) 王育徳「台湾語講座第七回 台湾語の語彙(1)」(『台湾青年』8、1961年、37頁-40頁)。その語に当てられた漢字の字面にとらわれない、音韻対応規則に基づく正しい語源探求の必要性を例示している。
 - 24) 王育徳「福建語放送のむずかしさ」(『中国語学』111、1頁-5頁・14頁、1961年)。NHK国際放送の福建語アナウンサー採用審査に立ち会った経験から、ニュース番組朗読に見られる台湾・大陸(厦門)・南洋の閩南語間の差異を語っている。
 - 25) 服部「ふたたび基礎語彙統計学について」(『計量国語学』17、1961年)の抜刷と思われる。言

- 語年代学の分裂年代算定公式の数学的問題に関し泉井久之助氏との間に同誌上で応酬があった。
- 26) 同日朝日新聞朝刊13面「季節風」欄は「国府の華僑対策」と題し、国府（台湾における中華民国政府）の華僑青年対策を批判した王博士の文章（「破産に瀕せる台湾の教育」第5回、『台湾青年』21号、同年8月25日）を紹介して「華僑は居住地の忠誠な国民となるべきだという王氏の結論は傾聴に値する」と結ぶ。
- 27) 橋本萬太郎氏（1932～1987）。同年10月イリノイ大学研究員として渡米。
- 28) 昭和46年度文化功労者の名簿が10月27日各紙朝刊に掲載された。他には中村勘三郎・西脇順三郎・平塚英吉・水谷八重子・森戸辰男・和達清夫の諸氏。
- 29) 博士論文の出版をめざし、内容の改訂方針につき服部先生の指導を仰いだと思われる。
- 30) 以下に見える中国音韻学の術語の一々については説明を省かざるをえないが、この一節の要旨は次のようにまとめられよう。
- 「火」を隋唐時代の標準語では（長安方言など） hua^+ （日本語旧仮名遣でクワ）と発音したが、現代福建語「火」の白話音（台南 hue^3 など）は音韻対応規則上これとは合致しない。『広韻』（十一世紀の辞書）は「火」 hua^+ のほかに「煖」 $huai^+$ という字を載せ、南方人のことばで“火”を意味すると説明している。これこそ現在の福建語「火」白話音の来源であろう。ここから演繹すれば隋唐標準語の -a（歌韻）・-ua（戈韻）は福建白話音の祖先では非常に早い時代から -ai（泰韻）・-uai（灰韻）に合流していたと考えられる。文中の賄韻は灰韻の上声韻。
- 31) 原文の音形表記にはすべて中国慣用の半圏点による陰上声の符号がつけられているが、印刷の便宜から数字³をもって代替した。
- 32) 『台湾語入門』（東京、風林書房、1972年）として出版。
- 33) 同年10月25日国連総会においてアルバニア案にもとづく票決の結果、中華人民共和国の国連参加が認められ、中華民国政府は国連を脱退した。
- 34) 王育徳「中国語の『指し表わし表出する』形式」（鳥居久靖先生華甲記念会編『中国の言語と文学』、天理、同会発行、1972年）。
- 35) 服部「序：王育徳著『台湾語常用語彙』（『方法』所収）。
- 36) 服部「言語過程説について」（1957年）・「ソスユールの *langue* と言語過程説」（1957年）、いずれも『方法』所収。
- 37) 服部四郎「アメリカ人の言語生活」（1954年、『随想』所収）。花井氏が引用した箇所は『随想』101頁に見える。
- 38) 周恩来総理追悼に端を発したいわゆる第一次天安門事件を指す。
- 39) 台湾を中華人民共和国の支配態勢下に収めること。
- 40) 鐘ヶ江信光氏（東京外国語大学前学長）。日本中国語学会理事長として、国際言語学者会議への協力を要請されたかと思われる。
- 41) 王育徳『台湾——苦悶するその歴史』（増補改訂版、弘文堂、1970年。1980年7月第7刷）。
- 42) 東京、日中出版、1983年。
- 43) 服部「音韻論から見た国語のアクセント」（1954年、『方法』所収）参照。台湾語には、緊密につづけて発音される単語群（動詞—目的語構造など）は、アクセント核のある最終一音節のみが本来の声調を保ち、その他は声調が変化するという「転調」現象がある。『台湾語初級』はこのような単語群を一つのアクセント素で統合された単位と見なし、// で前後を区切ってそれを示

した。

- 44) 「恩師服部四郎博士」。本稿「はじめに」の「服部先生と王博士」の項に転載。
- 45) 東京、日中出版、1983年。
- 46) 王^⑩注47) 参照。
- 47) 松本昭（一橋大学教授）・橋本萬太郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）・平山久雄（東京大学助教授）。王博士の肝煎りで、中国文学科出身の受業生四人、7月2日夜に新宿の東京大飯店に先生をご招待した。先生がご壮健なうちに謝恩の気持を表したいとの趣旨であった。なお王^⑧末尾参照。
- 48) 服部先生も王博士に電話で当夜の感想を述べられ、出席者一人一人につき批評をされた由であるが、その内容を王博士は語られなかった。
- 49) 服部先生が「言語学的エッセイ＝王育徳君著『台湾語入門』『台湾語初級』（1983年、『随想』所収）の原稿を王博士に示して誤解のないことを確かめ、『言語』十月号への掲載を予告されたのであろう。王^⑫「また特に私のために時間をさいて下さり」もこれを指すかと思われる。
- 50) 朝日新聞 8月13日朝刊18面・14日朝刊18面・15日夕刊10面・読売新聞 8月16日朝刊22面・Japan Times 8月16日など、台湾人元日本兵補償問題に関する記事のコピーが同封されている。
- 51) [言語学的エッセイ] 服部「王育徳君著『台湾語入門』『台湾語初級』、『台湾青年』208（1983年12月）19頁－24頁として転載。王博士の前書きには次のように書かれている。
- 一九五七年の『台湾語常用語彙』に始まり、『台湾青年』に連載した「台湾語講座」、さらに『台湾語入門』『台湾語入門補講』そして最近の『台湾語初級』にいたるまで、先生は私の主な論著を端念に読まれている。そればかりでなく二本のテープ（『入門』と『初級』）までも実際にまわして聞かれた。これほどまでに私の研究に関心をもつ人は台湾人の中にもおそらくおるまい。これはひとえに先生の私に対する愛情と期待によるものであることはいうまでもないが、それは私が独立運動に命を賭けていることをご承知の上である。先生との出会い、そのごのおつきあいはまさに一編の小説であるが、今日はもちろんそこまで書く余裕はない。
- 52) 同日 NHK テレビ第一チャンネル午後8時－8時50分放送。ポーランド人学者プロニスワフ・ビウスツキが19世紀末樺太に流刑中、蠟管レコードに録音した樺太アイヌ人の歌や踊りが、レコード修復作業の結果、音としてよみがえった経緯が報道された。
- 53) 村崎恭子氏（北海道大学教授）・池上二良氏（北海道大学名誉教授）。
- 54) 服部^⑬注20) 参照。

キーワード：服部四郎 王育徳 台湾語 福建語 中国語 台湾独立運動 言語年代学
奄美大島方言

(Hisao HIRAYAMA)